

「親ガチャ」を超えて

創世記 50章20節 出エジプト記 20章12節

人文学部チャプレン 柳田 洋夫

いつからか「親ガチャ」という言葉をネットなどで時に見かけるようになりました。親は選べず、その当たり外れで自分の人生も決まってしまう。そういう、大体は失敗事例についての、半ばあきらめの気持ちが込められた言葉のようです。この言葉をめぐっては、「自分の努力不足を親のせいにするのはよくない」といった批判がある一方、「経済的格差や虐待などの問題が背景にある」という意見もあります。いずれにせよ、考えてみるに、私たちの人生を決定する、とまでは必ずしもいかなくとも、強力に拘束してくるようなことは他にもいろいろあるのではないのでしょうか。学校ガチャ、受験ガチャ、就職ガチャ、結婚ガチャ、親戚ガチャ、友人ガチャ、ご近所ガチャ、地域ガチャ、時代ガチャ、社会ガチャ、国家ガチャ、はては自分自身の出生ガチャ……いくらでも思いつきます。ただ、その中でも「親ガチャ」は自分自身の選択の余地が全くないというところで、特に強い印象を私たちに与えるのだと思います。

本日与えられている聖書のみ言葉の、まず出エジプト記のほうを見てみますと、「あなたの父母を敬え」とあります。これはいわゆる「十戒」の一つですが、たとえ自分の親がはずれガチャで「毒親」であっても敬わなければならないのか、という疑問が出てきます。ここでは、この疑問について直接答えることはしません。そうではなくて、「親ガチャ」をはじめとする、一見、「運命」としか言いようのないように思われることに、私たちはどう向き合っていくたらよいのか、という、より大きな視点から考えてみたいと思います。

森岡正博という、生命倫理などで知られている先生がいます。彼は、この「親ガチャ」問題をめぐるさまざまな意見について、大きく二つに分けることができると言います。一つは、人生の全ては運命もしくは必然で、どうにもならないという見方です。そしてもう一つは、人はその自由な意思によって未来を切り開いていくことができる、という見方です。それは、古代ギリシャの時代から問われてきた人生の根本問題です。しかし、どんな親から生まれても、個人の努力で未来を切り開いていける社会にしていくべきだ、と森岡先生は言います。確かに、いわゆる上級国民や富裕層の子どもだけがどこまでも得をするような今の日本においては、「平等」という理念がすっかり忘れ去られたように思われます。だから、「生まれてくる環境によって圧倒的な不平等が生まれないように、いまある格差を極力是正していきましょう」と森岡先生が言うのはもっともなことだと思います。

しかし、平等な社会を一朝一夕で実現することは難しいことも認めざるをえません。なので、森岡先生は、一方では、「格差の消えない現実の社会の中で、どういうふうに分身の運命と向き合っていくべきなのか」ということを考えるべきだ、と言います。そして、私たちは、たいいていはつらいものである運命と和解していくことができる、と言います。起きてしまったつらい出来事に対しては、それを人生のかけがえのない貴重なピースとして自分の人生に組み込んで、運命と和解し、未来に一步を踏

み出すこともできるというのです。そしてまた、それぞれの局面で「勝ち・負け」や「成功・失敗」はあるけれども、「人生の全体」を考えてみれば、そこに勝ちも負けもない、と言います。人は一回限りのかけがえのない人生を生きており、人生の価値は他の人生とは比較できないからです。

以上のような森岡先生の見解には、それなりの説得力があるように思われます。ただ、「親ガチャ」をはじめとする人生のさまざまな事柄について、そこには「運命」以外の言葉はあてはまらないのでしょうか。結局のところ、自分の意志やがんばりなどではどうにもならない「運命」というのが私たちの人生の最終的なワードになるのでしょうか。

キリスト教の立場から言うと、そうではありません。キリスト教では「運命」ということは信じません。信じるのは「摂理」ということです。英語では providence と言いますが、これは、「前もって準備する」という意味合いの言葉でもあります。そういうことも含めて、摂理とは、神さまの救いのご計画と導きという意味です。本日与えられているもう一つの創世記のみ言葉は、この摂理というものへの信仰が言い表されているところです。これはヨセフというイスラエルの族長、つまりイスラエルのリーダーとなった人物による言葉です。ヨセフは、親ガチャというよりは「兄弟ガチャ」に恵まれなかった人でした。自業自得という面も少なからずあったのですが、兄弟たちからうとまれて、結果的にエジプトに奴隷として売り渡されます。エジプトでは、濡れ衣を着せられて牢屋に入れられるという目にも遭いました。しかし、夢を解き明かすという特別な能力によって、エジプトの王宮に迎え入れられます。そこで最終的にはエジプトの総理大臣にまでなります。そして、飢饉によってエジプトに食料を手に入れるためにやってきた兄弟と再会し和解します。そのときにヨセフが兄弟たちに言った言葉です。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」。この言葉は、摂理信仰をよく言い表しているものです。

奴隷として売り渡され、投獄までされたヨセフの姿は、どうにもならない運命というものを私たちに思わせるものです。しかし、そこでは終わらなかった。その先があったわけです。悪を善に変えることもできる、神の摂理によるものです。ヨセフの生涯を貫く神の導き、摂理がそこにはありました。その摂理によってヨセフには思いもかけなかった人生が開けました。

聖書が告げ知らせる神とは、この世界や人間を造って、あとはほっといてどこかに行ってしまうような方ではありません。これまでも、今も、そしてこれからも、愛をもってこの世界と私たちを導き、支えてくださるお方です。そのような神さまは、私たちを、どうにもならない運命などに閉じ込めてほっといておようなお方ではありません。

これは、ヨセフがたまたまハッピーエンドだったから言っているのではありません。聖書の示す神は、この世を良きものとして完成された方です。そして、私たちを、ご自身に似た者、神に似る者として造られた方です。その神さまが、今、この世界と私たちを導き、支えてくださっています。ある牧師の言葉を借りるならば、運命というのは、不可解なものです。そしてそれは、基本的に悪いもので、私たちを不幸に陥れるようなものです。それに対して摂理というのは、私たちの人生を愛によって導かれるお方を信じる、明るいものです。もっと簡単に言うならば、運命とは後ろ向きの暗いものであるけれども、摂理というのは前向きの明るいものです。

そう言いながら、私自身、かなりネガティブ思考の人間なので、これも運命、定めなのかと悲観的

な思いに駆られることも少なくありません。しかし、そういうときでも、どうしようもない運命だけが私たちを支配しているのではない、それを超える神さまの摂理というものがある、ということは忘れずにいたいと思っています。神さまは運命をも超えるお方なのです。

そして、私たちが摂理というものを信じて生きるために必要なのは「祈り」です。祈りとは神さまとの対話です。もし、自分の人生について問いたいことがあるなら、祈りにおいて神さまに問えばよいのです。運命にはいくら祈っても答えはありません。しかし、摂理の神への祈りは、必ず聞き届けられます。時には私たちが思ってもいないかたちであれ聞き届けられます。ヨセフも、そのような祈りの人であったと思います。祈りは、ただの気休めや独り言ではありません。祈りによって、私たちは、「親ガチャ」をはじめとする運命を超える摂理に触れることができます。そして、祈りによって私たちの人生は変わります。

私たちには、いつまでも運命にとらわれて後ろ向きに生きるのではなく、「摂理」を受け入れ信じて、前向きに生きる、そのような人生が備えられています。そして、そのような生き方に私たちは招かれています。ぜひ、みなさんも、その招きに応えていただきたいと思います。

2021年11月12日 聖学院大学 全学礼拝